
恩返しの森

よろすが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恩返し of 森

【Nコード】

N31450

【作者名】

よろすが

【あらすじ】

記憶を失くした少年？ポセット？は、相棒の黒猫？ナット？と一緒に、放浪の旅を続けている。ある日、旅の途中、気まぐれに立ち入った森の中で、不思議な少女と出会った。記憶の手掛かりを求めて、ポセットは森の奥へと進む。森に潜む狂気が、ゆっくりとポセットたちを呑みこんでいく。

その？ 一人と一匹（前書き）

選んでいただきありがとうございます。うれしい限りです。

初めて書いたものなので、広い心で見えていただけたらと思います。

その？ 一人と一匹

それはある晴れた日のことだった。

空に浮かぶ太陽、青い空、白い雲、澄んだ空気。木々が両脇を囲む緑の道。

群青の衣服に身を包んだ少年が、遙か遠くを目指して旅を続けている。右肩から左腰に跨げて掛けた鞆が歩くたびに揺れた。

帽子にはスチール製のプレートが付いていて、額を守っている。首に巻いた黒のスカーフと、藍色の上下のジャケットは防寒具も兼ねる。

腰から下がる二本の黒い棒は唯一の護身具。それらを纏う少年は、青い瞳に灰色の髪。決して背は高くなく、華奢な体つきをしている。

肩には黒猫が丸まっていた。炭から生まれたような真っ黒な猫。ただ、両耳の先だけが、僅かではあるが、体と相反して真っ白なのだった。

瞳は鮮やかなエメラルドグリーン。いつも絶妙なバランス感覚で、少年が飛ぼうが跳ねようがまったく動じることなく肩に止まっている。

黒猫のナットが尋ねた。

「ねえ、ポセツト。まだ休まないの？」

ポセツトと呼ばれた少年が答えた。

「うーん、もう少ししたらね。とりあえず食べ物を探そう。今なんにも食べるものないんだ。これは致命的だよ」

歩いても、歩いても、視界いっぱい広がる木々と黄土色の一本道が無くなることはない。ゆつくりと緑が流れて行き、黄土がスライドし、雲が追いかけてくる。

平和な道、平穏な道、静かな道、同じ景色。

「同じところをぐるぐる回ってるみたいで気持ち悪くなってきたよ。ポセツト、道間違えてない？」

「間違えてないよ。一本道なんだから間違えようがないだろ」

ナツトはつまらなそうに髭をたらし、ボケ々と空を見始めた。

ナツトが大きいため息をついた時、ポセツトは道端に咲いた小さな花に足を止めた。黄色の、小さな五枚の花弁を力いっぱい開いている。

緑の中にただ一つ咲き誇るそれは、良い目の保養になった。

「見なよ、ナツト。ほらこんなに小さくても……。ああ、いい匂いがする」

花に顔を寄せるポセツトを見て、ナツトも鼻を鳴らした。

「いい匂い」

ふわりと風が吹いた。花が大きく揺れる。

「あ、ポセツトあそこにもあるよ」

目の前の黄色い花と同じ花が、ちょっと離れた場所で揺れていた。

「ホントだ」

立ち上がり、もう一つの花の前でまたかがむ。

「あ、ポセツト、あっちにもあるよ」

「え？ ああ、本当だ……」

向こうにも同じ黄色の花があった。今度は走って向かう。

「変な花だね」

「ほら、ナツト。あっちにもあるよ」

また少し離れたところに黄色の花が咲いていた。ポセツトは立ち上がり、道沿いにずっと遠くまで目を凝らす。

同じく目を凝らしていたナツトが言った。

「よく見たら、いっぱい咲いてるよ」

道沿いに点々と黄色の花が続いていた。

抜けるような青空を、一羽の鳥が滑るように飛んでいく。

伸びる黄色い点々は、遠くに薄らと見える緑のドームにつながっていた。

「森があるよ、ポセツト。どうするの？」

ポセツトは振り返って、何もない、今来た道に小さく微笑んだ。

「とりあえず行ってみよう」

ポセツトは目の前に広がる森林を前に、大きく息を吸い込んだ。

「森、かあ……。困ったな」

「何？ ポセツト、森怖いのか？」

「迷ったりしたら困るじゃないか」

「大丈夫だよ、きっと」

迷路のように入り組む木々。その中で、たまたまポセツトの目にとまった一本の木。獰猛に皮を削られた木の身体に、四本の太く長い線が刻まれていた。

「あれは、爪痕……。？」

じつと一点を見つめて、ポケットと立ちつくすポセットに、痺れを切らしたナットが声をあげた。

「ねえ行こうよ、ポセット。どうせ他に行くあてもないんだしさ」

「ないこともないよ。確か、近くに町があったはずだ。行く道は探さなくちゃいけないけどね」

「ええー！ やだよお！ どうせ何も無い町なんですよ？ オイラ、森の中見てみたいよ！」

ポセットの耳元でニャアニャアだだをこねる。

「でもなあ……。何もないんだぞ？ どうせ、宝物とか期待してるんだろ」

澄まし顔のナット。でも、髭がピンと伸びた。

「やっぱりか」

「い、いいじゃん。ね、ちよつとだけ！」

ポセットはしばらく、前を向いたり後ろを振り返ったりうろうろした挙句、キッと前を向いた。

「しょうがないか。どうせ食べ物も採らなきゃいけないし」

「やったあ！」

二匹と二匹は木漏れ日が僅かに照らす木々の領域に足を踏み入れた。

その？ 一人と一匹（後書き）

なんだか中途半端に区切られてて申し訳ないです。

続きます。

その？ 音のない森

大きくしなっていた枝がピンと跳ねて水平に戻った。その先からは真っ赤に熟れた実がすっかり奪われていた。

他の木にすがるように絡みつく、ツル状の植物も、その細いツルに鮮やかな紫色の実をいくつも実らせていた。

それもまたピンと跳ねたかと思うと、きれいに実が採られて緑だけになってしまった。

「たくさん採ってきたよ。ポセツト！」

嬉しそうに駆けてきたナツトの背に、器用に乗せられたポセツトの帽子。そこには色とりどりの木の実が山のように摘んであった。

「おお、すごい。でも、ちゃんと食べられるのを採ってきた？」

「多分大丈夫。ポセツトは？」

ポセツトも上着をお腹のところで袋のようにして、そこにたくさん木の実を蓄えてきていた。

小さい実は機敏なナツトが担当。ナツトでは重くて採ってられないような大きめの実がポセツト担当。

大木の木陰に座り、日除けをしながらのランチタイム。

「たくさん見つかって助かったね。その日暮らしも楽じゃないよ」

ポセツトはオレンジ色で楕円形の実をガブリと頬張って、幸せそうに顔をほころばせた。

「でもオイラはの方がいいや。気楽で……」

ナツトも自分で採ってきた赤い木の実をパクリと口に入れた。途端に物凄い形相になって、真顔になって、ゴクリと飲み込んだ。

「ポセツト、この赤い実美味しいよ」

「いない」

「え！　なんで？」

「今スゴイ顔してたじゃないか。どうせ渋かったんだろ」

ナツトはちえっ、と呟くと、適当に緑色の木の実を咥えてポセツトに渡した。

「こっちの実は美味しいよ、きっと」

「はいはい、毒見ね」

ポセツトは実を嗅いだり眺めたりした。見た目や匂いでは特に危険な感じはしない。そこで、ちよつとだけ潰してみた。実の皮が裂け、真っ白な液体がトロツと垂れてきた。

ナツトが小さく歓声を上げる。

「やった、これは美味しそうだね！」

「いや、これはダメだ」

大体果汁が白いのは毒。食べちゃダメ。

「そもそも、こんなに白い果汁を見て美味しそうと思うナットがおかしいよ」

「えー」

「とにかく食べられないの。わかった？　――さてと、次はこれを見てみよう」

ナットが採ってきた木の実は大小合わせて十八種類あった。今ちようど半分の九種類を調べ終わったが、食べられるのはその内の三種類で、美味しいものは一種類だけだった。

「なんだか残り半分も期待できないな」

「もう、なんで食べられないやつばかりこんなに多いの！」

ナットは呆れるやら悲しいやらでかんしゃくを起こしたのか、まだ木の実が残っているポセットの帽子にバシバシと猫パンチを加える。

「動物も毒が入っているって知ってるんだよ。当然、食べられるや

つは減っていった、食べられないやつは残るわけさ」

「ちえっ、それじゃオイラが動物として劣ってるみたいじゃないか」

「まあ、否定はしないよ」

「ええー、否定してよ！」

話しながらも作業は続いていく。食べられないのは除けていき、全て調べ終わったときに、残っていたのはわずか四種類だった。その内、美味しいのは結局一種類。

食べられない方に避けられた山のような木の実と、食べられる方に除けられた一握みの木の実を見比べて、ナットがため息をつく。

「これだけ採ってきたのに、こんなちよっぴりしか食べられないなんてさ。あんまりだよ」

唯一美味しい種類の木の実が三つしかなく、二つをナットが、一つをポセツトが食べた。

変に酸っぱかったり、酸味が効きすぎていたりするような不味い実は、三種合わせて九つ。それでも貴重な栄養源。五つをポセツト、四つをナット、全て残さず食べた。

ただ、ポセツトの採ってきた実は、少ないがどれも美味しく食べることが出来た。

「ああ、なんだか、ちっとも食べた気がしないなあ」

「ちっちゃい実は食べられるやつ少なかったもんね」

お腹は明らかに八分目以下。

「あれ？　なんだかい匂いがするよ、ポセツト」

「何？　食べ物？」

期待に一人と一匹の胸が高鳴る。

「こっちだよ、ポセツト！」

「急ごう！　別の誰かに取られないうちに！」

草の中を突き進む、ナツトの小さい背中を追いかけて、足元に気をつけながら走っていく。苔の生えた場所で滑りかけたり、急な岩場でふらついたりしながら辿り着いたのは、たわわに実のなる大木だった。

「やったよ、ポセツト！」

「いや、待て、まだ食べられるかわからない」

大木は太く立派で、前に立つだけで年季が伝わってくるほどの威圧感を持っていた。

リンゴほどの大きさの実が山ほど実ったおかげで、その太い枝もしなり、ポセツトが手を伸ばせばすぐに手の届く高さだった。

匂いを嗅ぎ、皮を剥き、ちょっとしぼってみたり、眺めたり、最

最終的に一度舐めてから大きくかじった。

ナットが期待に胸を膨らませ、ポセットの顔を見上げる。

「ど、どう？　美味しい？」

「にっがぁーい」

「ええ！　そんなー」

「嘘だよ、美味しい。ほっぺが落っこちそう」

ナットはやった、と飛び上がり、早速ポセットに一つ取ってもらった。前足でしっかり押さえて、ガブガブとかじりつく。

「美味しい？」

「美味しい！」

昼下がり。陽はより強くなり、同時に大木の木陰はより涼しくなっていた。

ポセットは木陰に座り込み、後ろに両手をついて、大きく天を仰いだ。葉の間から覗く日光は、木の葉が揺れるたび途切れたり、瞬いて見えたり、球体だったことを忘れたようにグニャグニャと形を変える。

「ねえ、ポセット。オイラ眠くなったよ」

「寝てもいいけど、しばらくしたらすぐに出発……」

ナットは大きく欠伸をすると、くるくると小さく丸まった。しばらくすると、ちよつと膨らんで、しぼんで、また膨らんで……。まるで小さな黒い風船のように眠りに着いた。すっかり夢の中。

「しょうがないなあ、もう……」

ポセツトはまた天を仰いだ。目を閉じると、体を意識が満たしていった。

呼吸を止めれば、森の音が聞こえてきた。静寂という大音響。ポセツトを包む、大自然の息遣い。太陽の日差しが、空を覆う木の葉の一つ一つまで染み渡り、何よりも煌めく緑が降り注ぐ。

「静かだ……」

それを前に、ポセツトの声はあまりにも小さかった。

その？ 音のない森（後書き）

続きます。

その？ 森の夜は不思議な夜

日は暮れかけていた。徐々に西の空が紅みを帯びていく。

「う……ん？」

ポセツトはむくりと体を起こし、重い目をこすった。頭がぼーっとする。

いつの間にか眠ってしまった。ナットは変わらず真っ黒な風船のまま。

「今日はここでこのまま野宿かなあ……」

まばたきをする間にも、空はどんどん茜色に染まっていく。

ナットが起きた頃には、空はすっかり暗くなっていた。

木から実をいくつかもぎ、注意深く見定めてから口へ入れる。噛んだ瞬間ジワッと甘さが口へ広がり、喉を潤していく。

草を刈って円を作ったところに、落ちている枝を山のように集めてきて焚火の用意をした。鞆をひっくり返して、底に溜まった糸くず、紙くずだとかのゴミをなるべく集め、枝と一緒に据える。

「ちょっと足りないかなあ……？」

ポセツトは横目でナットを見て、ニタリと笑みを浮かべた。

「フギヤッ！」

ナットを捕まえて、その黒い毛を一つまみ。

「ひきゃーっ！」

叫び声は暗がりの森に響き渡り、遠くでは鳥たちが慌てて飛び立った。

「あれ？」

鞆から取り出したライターはガスが切れていて、なんとやっても火花が散るだけで炎が灯らない。

ポセツトは仕方なく、腰のベルトに繋げてある黒い棒を取り出した。とても慣れた様子で、カタカナの？ト？の形をしたそれを指先でくるくる回す。

正しくグリップを握り、構える。それは金属製のトンファーだった。

グリップには黒の薄いゴムが巻かれ、長い円柱が肘までしっかりと覆う。ただ、このトンファーは普通のものとは少し違っていた。

「ちゃんとつくかなあ……？」

ポセツトは手首を返し、円柱の長い部分が先になるように持つと、

先端を枝と密着するゴミやナットの毛に付けた。

ポセツトはグリップの上に付けられたダイヤルを親指で調節し、そのまま強く押した。ダイヤルはスイッチのように深く沈み、パン！ という何かが弾けるような音がして、トンファアの先端からは紫の火花が散った。80万ボルトのスタンガンがあつという間に火をつけた。

「よかった、ついた」

火種を消さないように注意しながら息を吹きかけ、だんだん大きくしていく。やがて立派な炎になった。

ナットはホツとするポセツトを半ば恨めしそうな目で見つ、我先にと焚火に近づき、早速まるくなった。昼は温かったが、夜は随分と冷える。

ナットが片目を開け、ポセツトを見る。

「ねえ、ポセツト」

「なに？」

「今日はなにか思い出した？」

パチパチと焚火がはねて、風がどうと木々を揺らす。炎も揺らぐ。森は静かだった。磁鉄鉱のような空は、重く暗く、それでいて強く輝く星を含んでいた。

ポセツトの口が開いた。

「――いや、なんにも」

風がやんだ。やがて火は消え、森にはいつも通りの夜が訪れた。

月が高く上がり、森を照らす。

「眩しいな……」

ポセツトは眠れないまま、木に背をついて月を見ていた。ナットは猫のくせに夜もぐっすり寝ている。

押しつぶされそうなほどに静かな森。深夜というだけあって寒さも最高潮。

――ガサツ――。

「ん……」

「ふにゃっ？」

ぐっすりだったナットが飛び起きるほど大きく聞こえた物音。当然、ポセツトが意識を張り巡らせる。体を緊張させ、両手が静かに腰のトンファーに伸びる。

ナットが足音無くポセツトの肩に乗る。そして聞き取れないほど小さく呟いた。

「十時の方向、七メートル。人の気配じゃない」

沈黙。

——ガシッ、パキッ——

「近づいてきてる……。六メートル」

「降りて、ナット」

ナットがサッと飛び降り、前傾姿勢で物音の方向を睨む。ポセツトはゆっくりと立ち上がった。

「ポセツト、ダメだ。こっちは月に照らされている。見られてるよ」

しかし、ポセツトはトンファーをベルトから引き抜き、手首の返しで二、三度回し、脱力したまま立ち尽くした。

また沈黙。

「ポセツト、なんだろう？ 見えないよ」

「森の入り口……」

「え？」

「森の入り口に、大きな爪痕のある木があった」

爪痕があった高さは、ポセツトの身長を軽く越していた。

「熊より大きかった……。多分、かなり大型の人狼だと思う」

人狼というのは大型で、後ろ足のみでの歩行、疾走が可能な狼のこと。同サイズの熊と人狼なら、熊が五秒とかからず喰われてしまうだろう。人狼だけでなく、普通の狼とも群れて行動するため、襲われればまず命はない。

しかし、ナットが異議を唱える。

「人狼はこんな所にいないよ。もっと高い山に住むんだから。それに、今近づいてきているのは一匹だけだよ」

「本当に一匹？　後ろにいたりしない？」

「絶対いないよ」

ナットの感覚は頼りになる。ポセットはそれをよく知っていた。

「なら、ちがうか……。な？」

——ガサガサ——。

ポセットがスタンガンの出力を最大に上げた時、

「！」

月明かりの下に現れたのは、一人の女性だった。

「人……？」

「そんな……」

一番驚いたのはナットだった。

「そんな、絶対に人の気配じゃなかったよ!」

「でも人じゃないか。女性だ……というより――」

?女の子?と言った方がしっくりくる年齢のようだった。緑、白、桃の三色の模様が印象的な長いワンピースが、月明かりに照らされる。

黙ったままポセットの顔をじっと見つめる女の子に、まずポセット、次にナットが警戒を解く。

「君は誰? どうしてこんな所に?」

女の子は答えない。

「ねえ、こんな所にいると危ないよ。風邪ひくよ?」

ナットが尋ねても答えない。女の子はただその大きな丸い瞳でポセットとナットを交互に見つめるだけ。

「あの……」

ポセットが口を開くのと同時に、女の子は満面の笑みを浮かべた。

「あ……はは」

つられて愛想笑いを作るポセツトに、女の子はゆっくり歩み寄り、背後からなにか出した。

「!」

とっさの動きに、ポセツトもナツトも一瞬の警戒。しかし、女の子の手に握られていたのは、ナイフでも銃でもない、ただの木の实だった。どこかで見たことのある実。

「これって……」

ポセツトは振り返って、大木を見上げた。やっぱり。

女の子が取りだした実は、今さっきポセツトたちが食べた大木の实だった。

「なんでこれを……?」

もとに振り返った。しかし、そこに女の子はいなかった。

「あれ……?」

「いなく……なっちゃった」

風が吹いた。木々がざわめいて、砂埃が舞う。森のずっと向こうまで見えるが、動くものは何も見えない。見回しても、あるのは木だけ。

もう一度風が吹いた。より静かに、より冷たく。

「オイラたち……、夢を見てたのかな」

「いや」

ポセツトは右手にしっかり掴んだ木の実をガブリとかじった。

「夢じゃないみたい」

不思議な夜は月とともに更けていった。

その？ 森の夜は不思議な夜（後書き）

きりのいいところ探したら長くなっちゃった。

続きます。

その？ マシンガン彼女

東の空に紫色が滲み始めたとき、ポセツトはすでに起きていた。

「今日中に森を抜きたいな」

まだ寝ているナツトをひょいっとつまんで肩に寄せ、鞆から出した地図と磁石で方向を見ると、西へ向かって歩き出した。

ナツトが欠伸まじりに尋ねる。

「そっち行ったら抜けられるの？」

ポセツトが頷く。

「ああ、西に行けば確実に抜けられるよ。前の町で気まぐれに買った地図だったんだけど」

「いい買い物したね」

「ただ、確かめたいことがある」

「もしかして昨日の女の子？」

「そうだよ、とポセツト。」

「あの子はとても不思議な感じがした。もしかしたら、僕の記憶と関係があるかもしれない。森は抜きたいけど、できればもう一度会いたいと思う」

「そうだね、確かに不思議な感じがした。絶対人の気配じゃなかったもん」

ナットが何をもって人の気配と言うのかは分からないが、ナットの感覚が頼りになるのはポセツトも認めるところだった。

「ナットの感覚は本当に頼りになるよ。でも、昨日のお前の感覚を信じたとすると、あの女の子は一体……？」

「お化けだったんじゃないの？」

同じ景色を歩き続けるうちに、太陽は随分高く上がってしまった。ずっと木の陰にいたので暑くはない。むしろ寒いくらいだった。どこからともなく、空を駆ける鳥の声。

「ねえ、おなか減ったよ、ポセツト」

「我慢しろ、ナット」

「ねえ、木の実採ってきたんでしょ？　一つ食べようよ」

「かさばるから二つしかないの。それにお昼は我慢して、夜に食べるんだから」

「ええ」

木の実で八割満たした腹も？ね？を上げ始めた頃。

「おや……？」

「わお」

茂みを掻き分けて、大きな葉っぱをのれんのようにひょいっと上げた先に、それは悠然と立ち尽くしていた。

「あ！ 人だ！」

女性だった。赤味がかった長い髪を背中に垂らし、丈夫そうなヘルメットと厚手の半袖短パンを着ている。探検隊員のような格好だった。

「よかったー！ 助かったわ、ありがとう！」

女性は飛びかかるかのようにポセツトに近づくと、両手を握ってブンブン上下に振りまわした。

「私、迷っちゃったのかと思って、ずっと不安だったの！ でも大丈夫そうで安心したわ。早速で悪いんだけど私お腹ぺこぺこのの、食べ物あるかしら？ あ、それより森の出口を教えてくださいませんか？ ああいいの、ごめんなさい。もちろんあなたの用事が終わってからでもいいわ。何しに来たの？ 木の実でも取りに来たの？ だったら私も手伝うわ！ さ、どれから取るの？ 食べれるやつ？ 毒入りのやつ？ 新種の木の実を探してたりして？ ステキ。やっぱり、あるかわからない新種を探すのって大変そうだけどロマンがあるわよね。まあ、私は木の実とかあんまり興味ないんだけどね。そうそう、ロマンといえば……」

マシンガンのように降りかかる言葉の雨。女性は一息に言いきった。しかし、まだまだその話は続いていくようだった。

ポセットは片手でマシンガンの銃口をふさいで、

「落ち着いてください」

女性を押しやりながらゆっくりと茂みから抜けた。

口を塞がれてなお、口をもごもごと動かすその女性は、自ら？ミコ？と名乗った。彼女も旅をしていて、昨晚森に入ったのだという。

「あのね、私森沿いの道を歩いていたわけよ。するとどうでしょう、森の中に女の子がいるじゃないの！」

「女の子——」

ナットにだけ、ポセットの目つきが変わったのがわかった。

「その女の子はね、うっすら発光しているようにも見えたわ。とにかくその子は迷うことなく森の中に突き進んでいくのよ。危ないよって声かけたんだけどね、聞く耳なしって感じでどんどん奥に入っていくわけ。こちら辺、猛獣が出るって聞いたから。もう、慌てて追いかけたわよ」

「猛獣……。それはもしかして人狼のことでは？」

ミコは両手をポンと叩いた。

「そうそれ！　なんかねー、出るらしいのよ。変な話よねー。人狼
つてもっと山の方に住んでるって聞いたんだけど……。怖いわよね
え」

ポセツトの背を冷や汗が流れ、ナットが目を大きく見開く。

「――ホントに、いたんだね」

「僕の言うことを信じてなかったのか、ナット」

「うん、全然」

小さく言ったナットの耳がくりくりと四方八方の音を拾う。

気を取り直して、ポセツトが聞く。

「その子はどんな格好をしていましたか？」

「えー、うんとねー。暗くてよく見えなかったけどお、軽そうな……、長いワンピースを着てたかなあ？」

「もしかしてそれって三色だった？」

「確か、そうだよ。月明かりだけじゃ何色かまではわかんなかったけど。よく知ってるねえ、猫くん」

やっぱり。ポセツトとナットが目を合わせる。そして、ポセツトの顔に笑みが浮かぶ。

「そ、それで……。その子は今どこに？」

「え、知らないけど？」

は？ とポセットが呆けた顔になる。ナットがすかさず聞いた。

「追いかけたんじゃないの？」

ミコは首を傾け、困ったように唸る。

「あのね、追いかけたには違いないんだけど、追いつく前に見失っちゃたんだあー。それであちこち探し回ってるうちに迷っちゃってさあー。いや、まいったね。あっはは。ところであの子の知り合いなの？ なら早く探してあげようよ。きつと困ってるよー」

ポセットはガックリと首を垂らした。地面からのナットの高さが三センチは下がった。

「それでね？ 牛車に乗せてくれたおばさんがまたいい人なのよお」

「あの、ミコさん」

「ん？ 堅苦しいなあ。ミコでいいよ、ポセットくん」

「いや、でも――」

「うーん、じゃあ、どうしても呼び捨てできないなら？ ミーちゃん？ とかにしてよ」

「いや、それも――」

「もー、じゃあ、私も君のこと？ポセツト？って呼ぶから、ね？ポセツトも私のことミコって呼んで？」

「えー、困りましたね……」

「もー、わがままだなあ」

ナットがポセツトの耳元で呟く。

「よく話す人だね」

「まったくだ。ちょっとこういう人は苦手だよ」

ひとまずミコを森の外に案内するため、二人と一匹は森の出口を探して西を目指していた。

「でね？ でね？ そこで食べたシチューがまた美味しいのよ！
こう、なんだかわかんない動物の肉が入っててえ、それがまたジュ
ーシーでねえ」

黙々と歩き続けるポセツトにお得意のマシニングトークを浴びせながら、ミコは流暢に後をついてくる。

どのくらいうるさいかというと、ポセツトがうんざりして思わず猫背になってしまうくらい。

さらに言えば、ナットが耳をぴったり閉じて、その頭が真ん丸になってしまうくらい。

その時、ポセツトが歓喜の声を上げた。

「あ——、これは……！」

「えー、何？ 何があったの？ 見せて！」

ポセツトは足元の草を手で掻き分け、それを見せた。

「これって——」

「足跡……？」

人の足跡。裸足。それは交互に少しずつ前にでて、くねくねと続いていた。

「あの女の子の？」

「大きさから見ても、恐らく……。そうでなくても、人がいるかも……。行ってみよう！」

「あ、ちよつと！」

ミコの案内そっちのけで、足跡の追跡が始まった。

草を掻き分けて、足跡を消さないよう、見失わないよう、慎重に進んでいく。注意深く足元を見るため、自然と体は曲がり、自然とナツトが前に転がり落ちる。

「にゃおお……」

ナットも意地になって肩にしがみつく。

「あはは、何これおもしろーい。枝が絡まってるー。あっはは」

その後ろで、ミコは変な形の枝に大爆笑。

到底乗ってられないポセットの肩はやめて、ミコの肩に乗りかえたナット。案外悪い乗り心地にムスツとしていると、ミコが尋ねてきた。

「なんであんなに必死になって探してるの？ 女の子の知り合いなわけ？」

「うーん、そういうわけじゃないけど。ポセットはちょっと聞いたいことがあるんだよ」

「えー、それってどんな？」

「？記憶？だよ。ポセットは昔の記憶がないんだ。だからその手がかりを探してるんだよ」

「へー」

ミコは一生懸命足跡をたどるポセットの後ろ姿をじっと見つめた。

「結構苦勞してんのねえ」

その？ マシンガン彼女（後書き）

だらだら長くてなんか申し訳ないです。

続きます。

その？ 追跡

足跡は立ち止まったり振り返ったりすることなく、真っ直ぐに続いていった。

所々薄くなったり、途切れたりしていたが、二人と一匹はどうかこうにか後を追っていった。

でも本当にどうかこうにかで、追跡は熾烈を極めた。

「え！ 嘘でしょ？」

「早くしてください。大丈夫です、僕がちゃんと受け止めますから」

二、三メートルはあろうかというちよつとした岩場。ごつごつした大きな岩には、緑の苔がわさわさと元気に根を張る。

ミコはその上で、困り果てたように下のポセットを見る。

「ほ、ホントにこんなところ降りなきゃいけないの？ 足跡ちゃんとあるんでしょうね？」

「ありますよ、だからこうして飛び降りたんですよ。だからほら、ミコさんも早く」

「だから、？ミコさん？やめてってば。どうせならミーちゃんとか

にしてゝ?」

「ミコさん!」

わかったわよおと小さく言つて、ミコは下を覗き込んだ。しかし、くらつ、とふらついて、その場に座り込んでしまった。

「やっぱりダメ。高い、高すぎる。私高いところダメなの!」

「もおゝ、早くしてくださいよお……」

大きく吸って、深いため息。

どしゃ――。

「いったたたたた……。もう、ちゃんと受け止めてよ!」

「な……んで、いきなり……。普通一声ぐらい……かけ……ませんか……?」

自分のお尻の下で苦しそうなポセツトを気にもせず、ミコは腰が痛いだの膝を打っただのと文句たらたら。

「ポセツトも大変だね」

そういうナツトも、ミコが飛び降りる前にさっさと主人の肩から逃げ出していた。

「大変だと思ふならちよつとは助けてよ……」

ポセツトは挫けそうになりながらも足跡を追った。

「あ、川！」

「喉が渴いていたんだ。丁度よかった」

森を流れる凜とした小川。その水は冷たく透き通り、ポセツトたちの喉も十分に潤してくれた。

「おいしい。なんだか自然百％って感じね！　そうそう、自然百％と言えばね、昔知り合ったおじいさんに？　天然糸こんにゃく？　をごちそうしてもらったのよ。それがまた美味しくてね」

「天然の糸こんにゃくですか」

「そう、木になるらしいのよ」

「い、糸こんにゃくがですか？」

「そう、あの？　糸こんにゃく？　がよ」

「気持ち悪いですね……」

「こう——、夏になるとこう——。糸こんにゃくの木にね。こう——、垂らしたモップみたいだね、こう——。もっさあ——って」

「？　もっさあ——ですか……。——そんなことより、下りましょう」

「え？　この川を？」

「ええ、多分足跡の主も下って行ったんだと思います。足跡どこに

「ありませんし」

冷たい水に足首までを漬け、滑らないように気をつけながらゆっくり下っていく。

「いっ…たーい！」 「うぎゃあ、つめたいい！」 「うわあ、すべるっ！」

気をつけているのはポセツトだけ。

「ちょっと、待ってよ！ うぎゃあ！ 滑る！ うわっ！」

八回目。

「もう少し静かにしてください。ここは綺麗な水が流れてますから、きっと動物も水を飲みに来ています。こんな足場の悪いところで人狼に会ったら、命はないですよ」

「人狼なんか会ったら、足場関係なく命はないと思うなあ」

「いいから、早くしてください！」

「ちえっ、ポセツトくん冷たいなあ。ここの水といい勝負だよ」

「もお……。仕方ないなあ。ほら、肩を貸しますから、ゆっくり下って行きましょう」

「お、ポセツトくん優しい。ではお言葉に甘えて……」

ぐいっ、ふらふら、おととと、ずるっ……。九回目。

ポセツトは小川に腰までつかったまま、帽子を絞った。藍色の帽子から透明な水が滴る。

「はあ、なんで僕まで……」

「あっははは、いいじゃん。水も滴るいい男！ 男前だねえ」

「僕はまあいいですけど、ナットがダメなんですよ」

「ありや……」

ナットは全身水につかって、目を開いたまま痙攣していた。とうか沈んだまま固まっていた。

「猫くん大丈夫？」

「こいつ水が嫌いで……。失神してますね」

「あっちゃ」

ナットを抱えて、（もうこれ以上濡れようがないので）闇雲に小川を下っていく。

ナットが目を覚めたのは、川を下って行った先で足跡を見つけた後だった。

その？ 追跡（後書き）

続きます。

その？ 狼退治

「怖かったよう……、死ぬところだったよう……」

「おお、よしよし、ごめんね、猫くん。私がドジなばかりに……。そして、ポセツくんが頼りないばかりに……」

悪口を言われているとも知らず、ポセツは草むらをガサガサと散策していた。

そして見つけた。

小さな足跡は川を下っても休むことなく、迷うことなく、変わらずに続いている。

「よかった、まだ続いている。それにしても一体、どこまで続いているんだ……？」

この最果てに居るであろう？ 女の子？ は、こんなところを通って行ったのだろうか。なんのために？ どこへ向かって？

「きゃっ！」

「どうしましたか？」

後ろではミコが目を見開き、ナットを強く抱いたまま固まってい

た。ポセツトから見て右の草むらをじっと見つめている。

「なにかあった——」

「しっ！」

ミコは今日初めて見せる真剣な顔で、強く短く静粛を促した。

草むらから出てきたのは一匹の狼だった。青を基調とした流れる毛並み。黄色に光る瞳が二人と一匹を一度に視界に入れた。

短く喉を鳴らし、一步一步計るように近づいてくる。

ナツトはフーッと牙をむいたが、ミコがそれを押さえつけ、ゆっくりと動いた。決して背は見せず、向かいあったまま後退さる。

ポセツトが口を開いた。

「ダメです、ミコさん」

いきなり普通に話すので、ミコもナツトもびっくりして固まった。

「こいつは明らかに腹をすかしている。僕たちを食べるまで追ってきますよ。逃げられません」

狼は声の主であるポセツトを鋭く睨み、舌を垂らしながらゆっくりと身がまえた。またポセツトも両手をトンファーに伸ばし、狼に歩み寄っていく。

「ポ、ポセツト……くん？」

すると、ナットももぞもぞとミコの腕からはい出て、

「あ、ちよつと！」

ササッとポセツトに走りより、狼の前で前傾姿勢をとった。

喉をならす狼は首を振り、ガウツと短く吠えた。

「げげ……」

「まいったな……」

草むらからはさらに三匹の狼が現れた。どの狼もベロリと舌を出し、興奮気味にポセツトたちを囲んだ。

「ど、どうするのよお……?」

ポセツトは舌打ちのようにチツチツと短く舌を鳴らした。ナットが反応して、駆けだす。

「こっち！」

「えっ！」

ナットは戸惑うミコの靴下を無理に引っ張って、ポセツトから離れた。もちろん、狼はそれに反応。混乱を見せたミコに襲いかかるうと牙を向き、飛びかかった。

「きゃあっ！」

しかし、すかさず投げたポセットのトンファーが寸前で狼に命中したので、牙も爪も腰を抜かしたミコには届かなかった。

急な動きに興奮した狼たちを引き付け、早く行けとトンファーを振るうポセットを後目に、ナットはミコを連れて、とにかくどこか遠くへと走り出した。

「猫くん、ポセットくん死んじゃうよ！」

「大丈夫！ いいから走って！」

「え……」

離れて行くポセットと狼。段々その姿が小さくなっていくなか、尻もちをついたポセットに二匹の狼が飛びかかった。

「あ！」

ポセットの一大事にと逆走を始めたミコを、ナットが回り込んで止める。

「だめ！」

「何言ってるの！ 彼、食べられちゃうわよ！」

自分を飛び越えて走るミコを、やはり回り込んでもう一度止める。

「だからダメだってば！ オイラたちが行ったら邪魔になっちゃう」

「だから何言ってるの、こんなときに！」

ぎゃおん——。

突然の声に、ミコとナットがポセットに目をやった。声の主はとびかかっていた狼。

「ほら早く！」

ミコは迷いながらも、ナットに先導されて木々の中に消えて行った。

吠える狼。前から、横から、後ろから、飛びついて離れて、噛みついて離れて。狼の卓越した天性のコンビネーション。三対一の攻防。

幾度とない攻撃の繰り返しを経て、ダメージはむしろ狼たちにあった。

狼に囲まれても全く生じない動揺、そして攻撃を加えようとすれば必ず返ってくる手痛いカウンター。森に迷い込んだ人間を幾度となく餌としてきた狼たちだったが、ポセットの放つ空気は明らかに森に迷い込み怯えているそれとは異なっていた。

見たことのないタイプの人間を前に、飛びつく隙も、その部分も見失った狼たちは、ただ混乱しながら周りを囲み、吠えたてることしかできなかった。

「……………」

怖気づく狼を前に、ポセットはトンファーについたダイヤルを調節した。

一瞬の静止を好機とばかりに飛びかかる狼。

紫の光が飛び散り、短い悲鳴を残して狼は地に伏した。

体を痙攣させながら横たえる仲間を見て、残りの狼は文字通り尻尾を巻いて茂みの中に消え去った。

ポセットは投げたままになっていたもう片方のトンファーを拾い、砂を払ってベルトに納めた。少し怪我をしたが、大したことはない。

「ナットとミコさんはどこいったかな……？」

視界の隅に残った頼りない記憶を道標に進んでいく。

ふと足を止めた。

「三匹……」

一匹はそこでぐったりしている。追い払ったのは二匹。

「初め、一匹出てきて――。その後、確か……」

三匹出てきた。

「まさか……」

足元にとどめの一撃。それは獣の足跡。ナットのものより大きか

った。

「これはまずい――」

ある程度離れた。ここまですればもういいだろう。ミコとナットは足を止め、来た道に向き直った。

「ポセットくん、ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。スタンガンもまだ充電足りてるはずだし」

「でも、スタンガンって言っても……」

「もう、心配性だなあ。今にひょっこり帰ってくるよ。待っていいよ
うよ」

ガサガサ――。茂みが揺れる。

「ほらね、噂をすれば……」

ガサッ。

「「え……？」」

出てきたのはポセットではなかった。

その？ 狼退治（後書き）

続きます。

その？ 往生

獐猛に踏み荒らされた草木の道。それを辿っていくのはそれほど難しいことではなかった。

「早く行かないと……！」

しかし、ポセツトには焦りが見えた。走りながら、聴覚に細心の注意を払う。ナットたちをつけて行った狼はきつと仲間を呼び、大勢で襲うに違いないから。

でも、その心配はすぐに解消された。草木の道が途切れ、その先端がガサゴソと蠢いていたのだった。

どうやら、つけて行った狼は途中でナットたちを見失ってしまったようだ。

「狼がドジで助かった——」

ホツとしつともトンファアを構え、ゆっくり後ろから近づいて、静かにスタンガンで仕留めた。

これでよし——。狼が気を失ったことを確かめた後、安堵の表情で立ち上がりトンファアをベルトに納めた。

「ナット！ ミコさん！ 出てきてください！ 狼は退治しました

よー！」

ざわつく森。しかし返事は聞こえない。

「近くにいるわけじゃないのか……。どこまで逃げて行ったんだろう？」

ガサガサー。

「っ！ ミコ……。さん？」

ガサツ。

ポセツトが驚きのあまり茫然と立ち尽くした。

「お、お前は……。！」

葉の擦れる音。差し込む日光が揺れる。

相変わらず森の中。草木を倒して進むのには体力がいるため、ミコもナツトもうんざりしたような疲れ顔。

「ねえ、ポセツトくんどこ行っちゃったの？ まさか本当に食べられてないでしょうね？」

「どこ行ったかはわかんないよ。でも、食べられてはない。絶対」

「そうなの……」

お得意のマシングントークも出てこない。本当に疲れていた。

くすくす……。ワンピースの女の子は楽しげに笑い、何度も振り返っては愛らしくミコたちに手を振って、着いてきてとはやす。

「いや、でも、あの女の子が茂みから出てきたときにはびっくりして腰抜かすかと思ったわよ」

「抜かしてたじゃん」

「抜かしてないわよ、座っただけよ、なによやる気なの？」

「なんでそんなにケンカ腰なんだよお」

「疲れてイライラしてんのよ。文句あるの？ やるときはやる女よ、わたし」

「猫にいきり立たないでよ。狼倒してよ」

「狼倒せたらこんなところで迷子になってないわよ！ ……ん？」

くんくん。空腹の鼻をくすぐるいい匂い。

ぐるりと首を回すと、匂いのもとはずぐそこに悠然と立っていた。

「大きいね……」

「すごい……。なんて立派な木――」

天高く伸びた身体、幾重にも連なった枝、屋根のように重なり生い茂った葉、どれも他の木々とは圧倒的に違う存在感を備えていた。そして何よりも違うのは、深緑に散らばった星を思わせる、五枚の花弁をいっぱい開いた黄色の花々。

「あれ？ この花、どこかで見たような？」

ナットが首をかしげる。

「森の中だもん。どっかで見たんじゃない？」

「そうかな」

木が作りだした巨大な影の中、地面から飛び出した太い根っこに女の子はちょこんと座りこんだ。高い木を見上げて口をポカンとする二人に向かって、女の子は早く来いと激しく手招きする。へこへこ影の下に行くと、隣に座れとポンポン根っこを叩く。

「なんだか、ここに案内してくれたみたいね」

「だとしたら、随分森に詳しいってことになるけど……」

相変わらず一言も発さないが、にこにこ花のように笑う女の子は本当に幸せそうだった。ミコが大人しく隣に座って、ギョツと手を握ってあげると、女の子はミコの顔を見て、またにっこりと笑った。

「ああ、もお。かわいいわぁ、この子」

ミコはたまらず女の子を抱きしめた。

「なんなのミコさん？　そういう趣味の人なの？」

ミコはナットに、眼光をこれ以上ないほど研ぎ澄まして睨んだ。

「違うわよ、何勘違いしてんのよ、ケンカ売ってんの？　買うわよ、やんの？　やるときはやる女よ、わたし」

「な、なんでそんなに不機嫌なんだよお」

「人が和んでるときに横からちよっかい出すからよ。人間様なめんじゃないわよ、猫といえども食う時は食うわよ。わたし、やる時はやる女よ！」

「わかった。もう何も言わない！　ごめんなさいい……」

ナットは前足で両耳を固くふさいで、縮こまったまま小刻みに震えだした。分かればよろしい、と満足げにもう一度女の子をギュツとするミコ。

幸せそうなミコの腕の中で、女の子は静かにミコの鼓動に聞き入っていた。

それは確かな、人の生きている証拠。体をめぐる命の音。

女の子はゆっくりと目を閉じた。

「あら、日が暮れてきたわね。暗くなってきたわ」

西の空は雲に隠れ、代わりに一つの雲もない快晴の東の空から、真珠のような一番星が顔を出していた。

「ポセツトくん、どこにいるのかしら？」

その？ 往生（後書き）

続きます。

その？ 危機、迫る

大きな葉っぱをひよいと持ち上げると、どこかで見たような木々が面白げもなく立ち並んでいた。

「もう、ナットもミコさんもどこ行っちゃったんだよ……。見つからないよ」

もう弱音も吐き飽きた。空は段々と紺碧に染まってきているというのに、ナットもミコも見つからない。そもそもそんなに遠くまで逃げることもなんてないのに、ちょっと離れてればいいだけなのにと、ブツブツ文句を垂れる。

「はあ。もう疲れた……」

振り返ると、三色のワンピースを着た女の子がさも面白そうに歩いてきていた。どう見ても、昨日の夜に木の実をくれたあの子だ。

もちろん、色んなことを質問した。どこから来たのか、なぜ森に居るのか、自分のことを知らないだろうか、出口はどこか……。しかし、

「なんで君は一言もしゃべらないんだい？ 聞こえてないの？ 話せないとか？」

何を聞いても、女の子は首をかしげてまたにこにこ微笑むだけ。

失った記憶に関係あるかと思ったが、全然そんな様子はなくて、ポセットは無駄足だったととことんがっかりしていた。

「ここはどこなんだあー……」

すっかり猫背になってしまったポセット。不意に、背中を引っ張られた。

「なに？ うわっ！」

女の子はポセットのジャケットの背中を引っ張った。そして手はそのまま肩から下がるバッグに移り、最終的にバッグを引っ張る形でポセットを引っ張り始めた。

「うわっ、何？ 何？ どうしたの！」

女の子は答えることなく、時折首だけ振り返ってにこりと笑うだけで、力いっぱい引き続けて行った。さながら飼い犬の暴走になすべなく引っ張られる飼い主のよう。

「どこいくんだよ！ ——ん？」

バタバタと走りながら、すごく強い匂いの中に居ることに気付いた。甘い、とろけるような匂い。

そして同時に、眼前に現れた巨大な木。暗がりの中青白く揺れる葉の屋根には、いくつもの花が咲いていた。

「あれは……？ あっ！」

木の下には人影があつた。一人、二人……、五人ほどこいるだろうか。

腰あたりまで伸びた草木を飛び越え、木の下まで走る。

「これは一体……。どうということなんだ……？」

そこにいたのは今自分を引っ張ってきた子と瓜二つの女の子たちだった。木の陰にも何人かいて、数えてみれば八人いた。

「君たちは一体……。どうしてこんなところに――」

女の子の一人が微笑みながら走り寄り、ポセットの手を握った。そして大きく腫れた木の根に座るよう促すと、たくさんで囲んで、ポセットに寄ってたかつて手をとったり背中をさすったり抱きついたりとやりたい放題。何を言っても聞かないので、ポセットも苦笑いしつつ、されるがまま大人しく座っていた。

不意に、一人の女の子が険しい顔で立ち上がり、ポセットから立ち退いた。顔面蒼白、驚愕と恐れの混じった顔だった。

「え、どうしたんだい？」

女の子たちはみんな笑顔をなくし、スッと立ち上がると、今度がポセットに立ち上がるよう促し、またバッグを引っ張って先導し始めた。八人全員がポセットを送っていく。

「なに？ なんなの？」

ポセットは疲れていたりナットたちが見つかなかつたりでほと

ほとうんざりな様子。もうどうにでもしてくれ。

花の匂いは段々薄くなり、ポセットはそのまま緩やかに送られていった。小川を通り、木の根を飛び越え、広い原っぱを越えて、とうとう森の出口にまでやってきた。草の生えた荒れ地の先に、舗装された道路が見える。

「外に案内してくれたの？　ありがとう。でもまだ出て行くわけにはいかないんだ。友達がいるから、連れてこなくちゃ」

女の子たちはポセットに捕まり、一斉に首を横に振った。そして、遠くに見える道を指さして、何人かの女の子がポセットの背中を軽く何度も押す。

「な、なに？　戻るなってこと？　行けってことなの？」

女の子たちは肯定の意は示すことなく、ただポセットに森から出るよう促す。

「ダメだよ。僕はまだ帰れないんだ。ごめんね」

どんなに言っても、女の子たちの行動は変わらない。痺れを切らしたポセットは、

「言ってもわからないのなら、無理やり行くことにするよ」

女の子たちを振り切って、無理やり森の中に走り戻った。女の子たちは慌てた様子でポセットを追ってくるが、ちよつと本気を出したポセットの脚力に常人が着いてこられるはずもなく、みるみるうちに小さくなり、やがて完全に見えなくなるほど離れた。

「ふう。なんなんだ？」

いつの間にか、ポセツトはまたあの強い匂いの中に居た。しばらく進むと、さつき女の子たちと会った木に出た。

「匂いのもとがこれか。立派な木だな」

少し目線を上げると、五枚組の黄色い花卉が木のあちこちに開いていた。

「あれ？ これはどこかで……？」

その花、見覚えのあるような気がした。確か――、そんな昔のことではない、つい最近……。

「あっ！ 分かった！」

それは昨日、森の入り口で見かけた花だった。五枚の黄色い花卉が特徴的だったあの花。

「あの花の木……？」

そのまま少し視線を下ろした。花の下に、何やらぶら下がっている。楕円形の何か。

「実だ……。あれは――」

それにも見覚えがあった。まちがいない。昨日ナツトと一緒に見つけ、食べた木の実だった。そして女の子の一人が昨日くれた木の

実でもある。

「あの実はこの木のものだったのか……。でも昨日実を採った木には花なんて一つも咲いてなかったのに――」

ガシッ。ガシガシッ。ガシガシガシッ。

「わっ！」

一斉に伸びてきた幾本の手が、ポセットの身体にしがみついた。振り返れば、さっき遙か彼方に置いてきたはずの女の子たちがポセットに群がっていた。

女の子たちからは笑顔が消え、みんな蠟人形のように無表情のまま。

「何なんだ？ 放せ！」

ポセットが振り切ろうとしても離れない。ただしがみついているだけではない。なにか、物凄い力がかかっていた。

「こ……のっ！」

しかし本気を出せばこの程度、ポセットに振りほどけないようなものではなかった。

女の子たちと距離をとり、じりじりと後退する。

「一体なんだって言うんだ？ 僕はただ、連れを探しに行くだけだ。君たちに迷惑はかけない」

「ダメ」

女の子の一人が初めて口をきいた。うつむいたまま、ぶつぶつと呪いを唱えるように。

「ダメ、ダメ、ダメ、ダメ、ダメ………」

壊れた人形のように何度も。その内、他の女の子たちも同じように呟き始めた。

その奇怪さは、薄暗い森の中ということもあってか、ポセツトにも恐怖の念が浮かんだほどだった。

「なんだというんだ……。君たちはここに住んでいるのか？　僕が邪魔だから出て行けというわけか？」

「違う」

「なら、なにがいけないというんだ？　なぜ僕を森から出そうとする？」

「出て行け」

「出て行くさ！　ただ、人一人と猫一匹を連れていきたいんだ。彼女らを見つけたら一緒に出て行く。それでいいだろう？　――君たちが手伝ってくれると、早く見つかるんだけど……」

ポセツトは微笑みかけながら、雰囲気をやかにしようとなるべく明るく話しかけるが、女の子たちの表情は硬い。

「ダメ」

「今すぐ出て行かないとダメってこと？」

「……………」

何が不満なんだろうか……。思考の巡るポセットの頭の中に、一つの仮説が生まれた。が、すぐに取り消した。

でも、言ってみた。

「まさか、？ミコさんとナットを連れて行くことがダメ？ってこと……………」

女の子たちは一斉に言った。

「そう」

「え！」

女の子たちは冷たく無表情のまま、ポセットを取り囲んでいく。

警戒しながらも尋ねた。

「なぜ？ ナットたちが森に居ることで、なにか君たちに得がある
とでも言うのか？」

「久しぶりに来たから」「人間はなかなか来ないから」

「――話し相手が……欲しいのか？」

ちがう、とみな一斉に首を振る。

「恩返ししなきゃいけないから」

「恩返し……？」

全員が口をそろえて答えた。

「ここまで運んでくれた」「だから私たちは育ち、大きくなるのが出来た」「だから、今度は私たちが育ててあげるの」

「一体、何のことを言っているんだ？」

「「出て行け」」

硬直する女の子たちとポセツト。

その時、低く唸るような声が森中に響き渡った。それは木々に長く反響して、次第に小さくなって消えた。

「今のは……まさか……」

瞬間、一匹の狼がポセツトの隣を走り過ぎて行った。目で追う間にまた一匹、もう一匹と何匹もの狼がポセツトにも女の子たちにも目をくれず、同じ方向へ風のように走り過ぎて行く。

「大変だ……、ナットたちが危ない……！」

その？ 危機、迫る（後書き）

また長くなってしまった……。精進します。

続きます。

その？ 森に住まうものども

草をかき分けて走る。体が熱い。

そう、匂いで分かる。

森中が知らせている。

風のように軽い体、鞭のようにしなる足を駆使して駆ける。

目指すはあの場所。匂いで分かる。五感が俺に訴えかける。

急がなくてもいい、でも、体が言うことを聞かない。

そう、急ぐ必要はないが、ゆっくり行く必要もない。ならばいつ
そこの猛る本能にまかせ、風のように走るとしよう。

夜を待つ森に、雄叫びが轟いた。

「あれ、なにか聞こえなかった？」

「そう？ 何も聞こえなかったわよ？」

女の子を膝の上に座らせて満足げなミコは、顎を女の子の頭の上

に置いてずっと空を眺めていた。女の子も大人しく座っている。

「低い雄叫びみたいなさあ」

「あ、流れ星！ えっと、えっと、何お願いしようかなあー！
…あ、行っちゃった」

「聞いてよー」

「聞ってるわよー」

ポセツトが食べられていないか心配は尽きないが、あまりにも自信満々にナットが否定するので、だんだん心配の念も薄れてきていた。

しかし、無くなりはしなかった。

女の子をナットにまかせて自分だけ探しに行こうかとしたが、やはりナットがそのうち返ってくると言ってきたのでとどまっているのだった。

「ポセツトくんおっそおーい。お腹減ったー」

「オイラもお腹減ったなあ」

ひよい。

「あら」

「にゃお！」

目の前に差し出された楕円形の果実。女の子はにっこりと微笑む。

「これくれるの？　ありがとう！　いただくわ！」

「オイラもー」

ミコとナットは大喜びで甘い香りのそれにかじりついた。

「あれ、この木の実……。昨日食べたのと一緒にだ」

「ふーん。あら、おいしいわこれ」

「あ、食べすぎだよ！　オイラの分なくなるじゃないか！」

「この実もなかなか甘いけど、猫くんも相当甘いわね。世の中は常に早い者勝ちなのよ」

実はあつというまに果肉をそがれ、種だけになってしまった。物足りなさそうに木を見上げたミコの目に、ずらっと垂れ並んだ木の实が見えた。

「この木の実だったのね。こんなにいっぱいあるんじゃない。もう、砂漠にオアシス、森に大木ね！」

「なにそれ」

ミコは大木にしがみつき、よじよじと登り始めた。が、二、三秒でずり落ちてきた。

「そもそも、女性に木登りさせようなんて非常識だわ。猫くん、出番よ!」

「結局オイラ……」

ナットは軽々と木の実のもとまで駆け上がると、銀に光る爪をにゅっと出して、枝と実を繋ぐ短い茎をつぎつぎ引き裂いていった。

「ふう、これでどう?」

ミコはナットに目もくれず、落ちてきた木の実をガフガフかじっていた。

「ちょっと、お礼とかないの?」

ガフガフ。むしゃむしゃ。しゃくしゃく。

「もう! ……ん?」

ドタドタバタバタ。騒々しい足音が押し寄せてくる。

音に気付いたミコがふと視線を向ける。一心不乱にかじりついていた口がポカリと開いたままになり、細い指から逃れた木の実が地面にすんと落ちた。

「え、え! 何よこれ、どーなってんの!」

慌てふためくミコ。目の前には黒い津波と化した狼の群れが迫っていた。どの狼も口元からよだれを垂らし、無我夢中に襲いかかってきている。

ナットが枝の上から言った。

「早く登って！ 食べられちゃうよ！」

「わわわ、わかってるわよー！」

大慌てで大木によじ登るミコ。その足が地面を離れ、迫った狼の爪がミコの靴を裂いた。ミコは足をばたつかせて必死に枝にしがみつく。僅かに間に合わなかった狼たちは、大木の周りをぐるぐると回って、悔しそうにバウバウと吠えたてる。

「ど、どうしよお……。ねえ、猫くん！ 本当にポセックくん無事なのよね？」

「——わかんない……」

その？ 森に住まうものども（後書き）

続きます。

その？ 絶体絶命

狼はだんだん数を増し、気がつけば下は見渡す限りの狼たちで埋まってしまった。吠えたてる者、なんとかよじ登ろうとする者、様子をうかがってぐるぐる回っている者。色々いるが、どの狼も狙っているものは一緒。

「もおいやあゝ」

半ベソをかくミコ。まるで干された洗濯もののように両手両足で枝にしがみつき、頬を枝に着ける。ナツトも枝の上にちょこんと座りこんで、世にも奇妙な光景を目の当たりにしていた。

「どういうこと……？」

空腹のあまり、木に登った一人の人間と黒猫に我先に食いつかんとしている凶暴な狼の群れ。しかし、その群れのまんなかには一人立ち尽くす女の子には、どの狼も見向きさえしない。女の子が完全にそこに居ないかのような、始めから存在すらしていないかのようなその様子は、不気味以外の何物でもなかった。

ミコは女の子に必死になって呼び掛ける。

ミコは、狼たちは自分を追うがあまりに目先の女の子に気付いていない、ばかめ。その程度に考えていた。

「早く逃げなさい！ バカ狼が気付いていない、今のうちよ！」

ところが女の子は獰猛に動き回る狼たちの波を掻き分け、大木の下まで歩み来ると、すっとミコへと手を伸ばした。

途端に狼たちが動くのをやめ、しんと空気が冷たくなった。

ナットの髭がピンと伸び、耳がピコピコ駆動する。ナットの中にざわざわとした嫌な気分が湧きおこった。

「待ってて、今引っ張り上げるから！」

動きを止めた狼を見て、ミコはこれ幸いと右手を伸ばした。

「ダメだっ！」

ナットが言うが早いか、女の子の小さな手が、ミコの細い指を越えて、その白い手首をがしりと掴んだ。

ガクツと急な重さがかかって、ミコは今にも枝から落ちそうになりながら、女の子を引き上げようと力を込める。

「ダメだ、放して！ その子を引き上げちゃだめだ！」

奥歯をくいしぼる。自分でも驚くほどの力が湧いて、女の子が少し浮いた。その時。

がくん——。

「えっ？」

視界が大きく揺れて、強い衝撃が背中に入った。

気付けば大木がミコを見下ろし、ミコは仰向けで地面に倒れていた。

「何で……？」

もちろん、誤って落ちたのではない。大木から、小さな女の子の手によって、引きずり落とされたのだった。

女の子はまるで石で造られたような冷たい表情でミコを見下ろしていた。啞然とするミコの周りを、飢えた狼が取り囲んでいく。

「何してるの！ 早く登って！ ミコさん！」

何をしていいのかわからなくなって、ミコはただ啞然としていた。低く鳴る狼の喉。

一瞬の動き。ふと見れば、ミコの左肩には灰色の狼がちりと噛みついていていた。ベージュの服に鮮血が一筋垂れ、不気味な赤の模様を作って落ちて行く。

狼はそのまま二、三度首を大きく振った。ミコは体ごと揺さぶられ、肩からはさらに血が噴き出し、声も上げられないほどの恐怖と痛みが頭を駆け巡った。

「ああ……！ あ、うあ……」

喉から絞り出すように発した声は、言葉になることなく狼たちの

騒ぎ声に消えてしまった。

口をミコの血で赤く染めた一匹が、とどめを刺そうとゆっくり歩み寄ってくる。その後ろには、舌なめずりをして待つ狼の群れと、にこりともしなくなった女の子。

ミコは一つの絵の中に居た。這い寄る狼どもはよく見れば黒い霞でかたどられていた。ついには狼の形を崩し、うずまき、大鎌を振るう死神へと変わる。そんな幻想に囚われた。

「ミコさん逃げて！」

幻想を切り裂く救いの声。霞が消える。

空から舞い降りたのは救いの天使ではなく、逆転の女神でもなく、ただの真っ黒い猫だった。

ナットは前傾姿勢をとり、毛を逆立てて狼をにらみつける。獲物を前に邪魔に入られた狼の乱暴な前足をかわし、続けざまの牙もかわした。そして、剣と言うにはあまりにも微弱な、さしずめ花の棘のようなその小さな牙を狼の土臭い鼻に突き立てた。

しかし、微弱な棘が多少刺さった程度では、狼が首を振っただけで振り下ろされてしまう。着地したナットを払う狼の前足。転がるナットを押さえつける牙。狼のほうはまるでサーベルのような、戦いの武器。ナットの体を引き裂くことなく、甘噛みの要領でがっしりと捕まえた。

「うわっ！ くそ！」

バタバタと体をよじらせ、牙から逃れようとするが、あまりにも力不足だった。後ろで見えている狼たちのざわめきが、愚かな猫を嘲笑っているように聞こえる。

「ミコさん、逃げてえ！」

そう言った後、ナットは背後の狼たちに向かって投げ捨てられた。その後、遠くでナットの悲鳴と、お手玉のように放り上げられる小さな黒いものが見えた。

ミコは肩の痛みも忘れ、頭の中が真っ白になったまま、後ずさるように足を動かしていた。近づいてくる狼がただただ恐ろしく、残酷に見えた。

ドンッ――。

「あ……」

背が何かに当たった。背を伝う僅かな感触で分かる。どうやら、捨てるほど立ち並ぶどれかの木に当たったようだ。

狼は一足飛びでミコの視界を掌握した。ミコの目の前にはもはや、狼の牙と深く暗い喉が見えるだけ。

その？ 絶体絶命（後書き）

お腹すいた。

まだ続きます。

その？ 一難去って

何もかも見えなくなった。真っ暗。音もない、風もない、光もない世界が広がって、何かが体を離れていくような気がした。

しかし。

僅かに開いた目の前に竜巻がおきたように、狼も木々も空の月も消え失せたかと思うと、次は時間が止まってしまったように目の前がピタリとスローに見えた。

「あれ……？」

不思議ではあったが、不自然には感じなかったその僅かな時間。今度は目の前が、大きな一枚の絵のように見えた。外から、それを見ていた。

それはとても不思議な絵だった。空を何匹もの狼が舞い、砂埃が長く尾を引いて、目の前にはこちらに背を向けた少年が、痛手を負った黒猫を肩に乗せ、紫の光と砂利を散らせながら立っていた。

やがて絵は崩れ、音と風が帰ってきた。

「ポセツトくん……」

ミコの口が勝手に動いた。

突然の乱入に怒りと興奮が限界に達した狼たちが、怒濤の大波となってポセットに襲いかかる。

「危な……」

瞬間、見えたのは円。紫の閃光の軌跡が宙に描かれる。そこに舞い上がる黄土色が加わって、月の光が加わって。星の色も、深い森の緑も、全て混ざり合って、嵐を思わせるグラデーションを作り出した。

「――い」

言い終わる前に片付いていた。

泡を吹き、倒れ込む狼たち。残りど、早く気がついた狼たちは怯えて逃げていった。静かになった後、周りを見渡してから、彼はミコを振り返った。

「――大丈夫でしたか？ 遅れてすいませんでした」

ミコの中から、水をいっぱいに溜めたコップを倒したように涙が流れ落ちた。あごを伝って、ベージュの服を濃く染める。

「だ、大丈夫ですか？ あ、怪我してるじゃないですか！ 早く森を抜けましょう、出口を見つけましたから」

ポセットは鞆から消毒液と包帯を取り出して、ミコの肩を手当てした。巻いた包帯にはすぐに赤い点ができて、だんだん大きくなった。

「急ぎましょう、立てますか？」

「ポセツトお、オイラも手当てしてよお……」

「待ってな、今消毒液を……。骨とか折れてないか？」

「たぶん、ない」

ぼろぼろの猫一匹と女性一人。それに対して、狼を倒してのけた少年はかすり傷一つ無い。

ミコは肩を預け、一緒にのそのそと歩き始めた。

「あなた、どうなってるの？　すごく強いよね……」

ミコの真面目な口調に、ポセツトも正直に答える。

「普通の人間じゃ……ありませんから」

ポセツトの顔に笑みが浮かんだ。それは今にも消えそうなほど儂く、切ない笑顔だった。

「そう……なの……」

一步一步ゆっくりと進んでいく。すると目の前に、女の子がひよこつと現れた。

「あ……」

「ポセツト！ この子がミコさんをこんな目に遭わせたんだ！ 狼たちのグルだよ！」

ナツトが吠えた。ポセツトはなだめるようにナツトを軽くなでると、女の子を真っ直ぐ見つめた。

「悪いけど、僕の勝ちだ。まだやるかい？」

女の子は睨むようにポセツトを見ると、両手を大きく広げて、通せんぼした。

「無駄だ。君たちの事情は大体飲み込めた。でも、僕たちは簡単にやられるつもりはないよ。君たちがどんなに抵抗しても、僕たちは生きてこの森を出て行く」

それでも女の子は動じることなく通せんぼを続ける。

「ごめんね」

横を通り過ぎようとしたその時、白い手がポセツトの胸を強く押した。

「な、なによこれ！」

ミコがうろたえた。

目の前に現れたのは、さっきポセツトが置いてきた女の子達だった。いや、もっと増えているかもしれない。大勢の同じ顔をした女の子達が両手を大きく広げて二人と一匹を取り囲む。

「一体、どうなってるのよ！」

「うわわ、双子だったんだ！ いや、えっと……、たくさんいすぎて何子かわからない！」

ミコとナットが混乱する中、ポセットが冷静に言い放った。

「通さないつもりなら、君たちを焼き払ってでも出て行く」

そして空いている左手をトンファーに伸ばし、威嚇でスタンガンを何度か鳴らした。

緊張と胸騒ぎで汗ばんだミコの首筋を、風だけが緩やかに吹き抜けていった。

女の子達は表情一つ変えることなく、置物のように通せんぼを続ける。しびれを切らしたポセットが、トンファーを握りなおした。

——グオオオオオオオツ！

何よりも早く反応したのはナット。耳が雄叫びの方向をとらえ、髭が風を読み、鼻が臭いを探る。ポセットは凍り付いたような険しい表情でナットと同じ方向を見た。ミコは雷でもなったのかと不安げにキョロキョロ辺りを見回す。

「ポセット、大変だ……。もうそこまで来てる——」

「何、何が来てるの？ まさかまた狼……？」

「狼だったら、どれだけ良かったことか……。急ぎましょう！」

「待つて！ この子達はどするの？」

「この子達は大丈夫です！ それより僕らが危ない！」

「ダメよ！ また狼が来るんでしょう？ この子達も連れて行かないと！」

ミコはポセットの背から無理に降りて、肩をかばいながら一番近くにいた女の子の手をつかんだ。

「ダメだ、ミコさん！」

ポセットがその手を叩き下ろし、すばやく女の子から離れた。肩のナットが言った。

「さっきあの子に木から落とされたじゃないか！ あの子たちは狼とグルなんだよ！」

「そんなこと分らないわ！ さっきだって、たまたまかもしれないじゃない！」

「じゃあなんで今オイラたちを通せんぼするんだよ！」

「そんなの知らないわよ！ とにかく、見捨てるなんてできないわ！ 食べられちゃうかもしれないじゃない！」

「静かに！」

ポセットの声に、二人の声はおろか大きな森までが、しんと静ま

ったように思えた。ナットの耳が的確に反応し、同時に毛がハリネズミのように逆立った。

「ダメだ……、もう、間に合わないよ」

その僅か数秒後、二メートルを超えんばかりの獰猛な獣が草木を掻き分けて現れた。

その？ 一難去って（後書き）

続きます。

その？ 怪物

人狼は大地を揺るがすほどの咆哮を浴びせ、同時に？Z？に折れ曲がった足を力強く前に出し、両手に備えた長く鋭い爪を構えた。

森がおびえるようにざわざわと騒いだ。

「うそ……でしょ？」

ミコは座り込んで、呆然と人狼を見つめた。巨人のような体躯に、狼の凶暴さと強靱さを兼ね備えた野獣。本や口頭でしか知らなかったそれが、今まちがいなく自分の前に存在していて、あるうことか自らを殺めようとしている。

力の抜けたミコを担ぎ上げ、ポセツトは大きく息を吸った。足に力の限りを込め、女の子たちの柵を跳ね越えて、近くの木へと弾丸が弾けるように走り行った。

急な行動に興奮と衝動に駆られた人狼は、ポセツトを追って疾風のように走り出した。僅か四、五メートルという距離を進むだけのポセツトに対して、その三倍はあろうかという距離を、人狼は風のように近づいてくる。

「急いで、ポセツト！」

「しっかりつかまって！」

ポセツトは地面に穴が空いてしまうのではないかと思うくらい強く大地を蹴り、木の太い幹をもう一度蹴り、幾重にも重なる丈夫な枝々にしがみついた。そのまま、少しでも高くへ木を登っていく。

「すごいジャンプ……」

ミコはまるで翼の生えた天馬に乗っていたかのような感覚を味わい、ちよっともう一回やって欲しいくらい感動していた。でも、下を見たらその気も一瞬で失せた。

木の下では、人狼が悔しそうに吠え、その爪で木を倒そうと乱暴に爪を振るっていた。大木もその猛攻に耐えかね、ぐらぐら大きく揺れる。今にも切り倒されてしまいそうだ。

「ちよっと、どうするのよ！ このままじゃこの木が倒されちゃうわよ！」

「大丈夫ですよ。ちよっと下りてもらえますか」

ポセツトはミコを枝に座らせ、ナットをその膝の上に下ろした。

「ど、どうするのよ」

「ナット、ミコさんを頼むよ。うまく逃げてね。このまま真っ直ぐに行けば森の出口があるから。あと、この鞆の中に消毒薬が入ってる。これでなんとか怪我を手当てするんだ。……頼んだよ」

ポセツトは森の出口のある方向を指さして、ナットの頭を軽く撫でた。

「うん、わかった」

「ちょっと、どうする気なの？」

ポセツトは答えることなく、木の幹を強く蹴って、人狼の頭上を遙か飛び越えて着地した。

人狼は木を襲うのを止め、ポセツトに向きなおった。

「まさか囧になる気なの？」

ポセツトがトンファアを抜くが早いか、人狼はあつという間にポセツトに駆け寄り、その五本の爪を大きく横へ薙いだ。ポセツトの小さな体が、まるでかんしゃくを起こした子供が人形を投げ捨てたように、いとも簡単にすつとんだ。

「ポセツトくん！」

「ポセツト！」

ポセツトは両手について何とか立ち上がり、ふらふらとトンファアを構えた。紫の火が激しく空気を打ち、乾いた破裂音が響く。

恐れも手加減もない野性の一撃をトンファアが捉え、ポセツトの足が地面を削りながら少し後退した。スタンガンを当てる暇もなく次の一撃。肘まで覆った黒のトンファアが衝撃を流し、爪をそらし、体勢を崩す。

しかし、バネのような速さで次々に容赦のない攻撃が襲ってくる。

ポセットの回避行動はすさまじい集中力と機敏な動きでしばらく続いた。しかし、大きく力いっぱい振られた人狼の右手が、ついにポセットの体を宙へと放り上げた。

「ああ！」

落ちてくる少年にとどめを刺そうと待ちかまえる人狼を、回転する二本のトンファーが襲った。ひるんだ隙にポセットは体勢を立て直して着地、すぐさま距離をとった。

「すごい！ 空中でトンファーを投げたのね！」

「でも間違って二本とも投げちゃってるよ。手が滑ったのかな……」

「そんな。ここまであの怪物の攻撃をかわし続けて、おまけに空中でトンファーまで投げて一矢報いたのよ？ そんなドジするわけないわ！」

ポセットは、怒りのあまり天を仰いで叫ぶ人狼の足下に目をやって、二本の愛用武器を見つめた。

「手が滑った……。もう武器がない……」

やっぱり手が滑ってた。

「どうしよう……」

その？ 怪物（後書き）

続きます。

その？ 本気

人狼は狂ったようにポセットに突っ込んできた。ポセットはそのまま大きく宙へ跳び、人狼をかわした。

つもりだった。

「しまった――」

しゃがんだ状態から跳躍でかわし、トンファーを取りに行く算段だった。しかし、人狼は途中で突進を止め、爪を構えて空を見上げた。突進はフェイントだった。

「ポセット――」

ミコが叫び終える前に、銀の爪がポセットを弾き飛ばした。ポセットは大きくバウンドし、ゴロゴロ転がって止まり、ピクリとも動かなかった。

「そんな……、ポセットくん……」

ミコがショックのあまり絶句する。枝から落ちそうになり、慌てて幹に掴まる。

「どうしよう、どうしよう！ ポセットくんが！ 助けなきゃ！」

わめくミコを横目に、人狼はのしのしとポセットに近づいていく。

「ポセツトくん！」

「ポセツトお！」

声が聞こえたかは分からないが、ポセツトはがくと震える手を地に着き、なんとか立ち上がろうと両膝を立てた。生まれたての子羊のように力なく、か弱い。

「逃げて！ 早く！」

しかし、人狼は弱った獲物を弄ぶように何度もポセツトを蹴り転がした。

「あああ！」

居ても立ってもいられなくなったミコは、肩の痛みも忘れて、木を降り始めた。

「ミコさん！ ダメだよ、ここにいて！」

「何言ってるの！ ポセツトくんが食べられちゃうわ！」

蹴り飛ばされながら、ポセツトは考えていた。

「（ベルトにナイフがある。殺したくなかったけど仕方ない、あいつが僕を食べようと顔を近づけたら、これで頭を一突きに……）」

弱りながらも、致命的な痛手はまだ受けていなかった。揺らぐ視界の中、後ろ腰に据え付けられたナイフに手が伸びる。

人狼は、ついにとどめを刺そうと牙をむきだした。

「(来た!)」

バコッ。

人狼の頭に、手のひらほどの石が飛んできた。人狼はゆっくりと振り返る。

「化け物! ポセツトくんを放しなさい! 私が相手よ!」

痛めていない右の手で、地面に座ったまま石を投げる。方向も強さもバラバラだが、振り返った人狼の顔面に、まぐれで一つ当たった。

人狼はポセツトを放り捨てて、ミコにゆっくり近づいていく。

「げ、来た! このお!」

石を投げる。人狼は大きな手で軽く払い落とすと、速度を落とさずに歩み寄っていく。

「(まずい!)」

「ポセツト! ミコさんがあ!」

ポセツトはガバツと跳ね起き、走り出した。途中、落としたトンファアを拾い上げ、一つを人狼の足を狙って投げた。

人狼は軽くトンファアをかわし、向かい来るポセツトに立ち向かった。ポセツトはスタンガンの出力を最大にあげ、スイッチを押すっぱなしで人狼に突き立てた。

しかし、人狼の目にも止まらぬすばやい爪がトンファアを弾き、鋭く尖ったもう片方の爪がポセツトの腹部に突き刺さった。

ポセツトの体が宙に浮き、再び地に着いたときには、力なく膝から崩れ落ちた。

「うあ……」

「ポセツトくん！」

ポセツトはビクビクと痙攣を繰り返し、動かなくなった。

人狼はゆらりと振り向き、鮮血のついた爪を振りかぶり、ミコに飛びかかっていった。

「（ミコさんが……）」

消えそうになる意識の中で、体中の何かが噛み合った。

「―――！」

ミコが声を上げるより早く。枝から飛んだナットが人狼に飛びつくより早く。そして、人狼の爪がミコを捉えるよりも早く。ポセツトの右足が人狼の脇腹をえぐるように深く突き刺さっていた。

人狼の体はそのまま跳ね上げられ、三百キロはあろうかという巨

体が宙を舞った。

「ポセツト……くん？」

「ポセツト！」

ポセツトは口元の血を拭い、投げたトンファアを拾って、ナツトとミコに言った。

「そのまま動かないで」

ポセツトはいつもとは全く違う険しい顔つきで言い、帽子とジャケツトを脱ぎ捨てた。白いワイシャツには鮮血が染み、五つの穴が開いていた。

弱っていたはずのその体には、力がみなぎっているようだった。

「だ、大丈夫なの？」

ポセツトはトンファアを握り、口から胃液を吐く人狼に向かい合った。

「今ならまだ殺さないであげられる。今のうちに森の奥へ帰るんだ」

野性は元より、怒りと空腹に狂った人狼に、そんな言葉が通じるわけはなかった。人狼は猛り、爪を振り上げ、牙を剥き出し、ポセツトに咆哮を浴びせた。

「ポセツトくん死んじゃうわよ！ 猫くん、どうにかして！」

「大丈夫、ポセツトは死なないよ！」

「え？」

「ポセツトは、？あれ？をやる気だ。すごく久しぶりに……」

短く一声吠えた後、人狼はポセツトに飛びかかって行った。今まで以上に速く、力のこもった猛攻。岩をも砕く勢いの爪を自分より二回り以上小さな人間にぶつけていった。

しかし、その爪がポセツトに当たることはなかった。

「……………」

ミコは絶句していた。

ポセツトの動きはあまりにも速く、鋭かった。爪をさばいた腕がそのまま人狼の体に突き刺さり、その場で回転し、次の手が食い込み、蹴りを浴びせ、体のバネを爆発させたようにまた拳が人狼にたたき込まれる。

人狼も負けじと爪を駆るが、ポセツトの動きは人狼のそれとは遙かに違っていた。全てが見えていて、初めから知っていたように爪をかわし、かわしたときの体の回転に乗せて次の攻撃が繰り出される。

ポセツトの動きは大変小刻みで、的確に相手の弱点を突いていく。

鋭いアッパーが人狼のあごととらえ、空を仰がせる。人狼が小さく声を上げ、ふらついた瞬間。

なんとも形容しがたい、激しい音が鳴った。釣り鐘を鉄球で叩き割ったような、幾千の獣の雄叫びを入り混ぜたような、爆発音に似た轟音。

ポセットの体が消えたように見え、ポセットが現れたかと思うと、次は人狼が消えていた。

人狼はさきほどのポセットと同じように宙を飛び、地面を転がって動かなくなった。その口からは泡を吹き、体は小刻みに痙攣していた。

「おみごと」

ナットが落ち着いた様子で言った。

その？ 本気（後書き）

続きます。

その？ アクセル

「うう……」

ポセツトはふらつき、その場に座り込んだ。深手を負った腹を押さえる。赤い染みは広がっていた。

「これは、出来れば……使いたくなかったんだけどね」

ポセツトが元の表情に戻って、哀しそうな目で微笑んだ。体を抱え、小刻みに震える。

「何なの……、今の？」

とても人のものとは思えない動きだった。とても速かった。そして、最後の一撃に至っては、もはやどう言っているのかわからない。

ナットがぼそぼそと説明し始めた。

「今のが、ポセツトの本当の力だよ」

「本当のって……？」

「主に命の危機が迫ったとき、若しくは本人が自分の意志で体内のスイッチを入れることで発動する機能。？アクセル？ってポセツトは呼んでる。自動車のアクセルみたいに何段階も力分けされて、

引き出す力が制御できる。使ったときは身体能力が飛躍的に向上して、意識も研ぎ澄まされて、まさに自動車をアクセル全開でかつ飛ばした時みたいにすごい力が出る。……らしいよ。前に言ってた」

「なにそれ、まるで機械みたいね……」

「それは……」

「？」

「あのね、実はポセツトは——」

「僕がなんだった？」

そこまで言ったとき、ポセツトが戻ってきた。腹を押さえ、擦りきれるような息をしていた。

「にゃん！」

ナツトは急に慌て始めた。どうやら、言ってはいけないことだったらしい。なんとなく察したミコだったが、我慢できずに尋ねた。

「ねえ、あなた、本当に人間なの？」

「はい……？」

「助けてもらっておいてなんだけど、あなたとても人とは思えないわ！ 最後のなんて何よ？ ものすごいパンチだったわ！ 人狼を銃も使わないで退治するなんて、人の出来る事じゃないわよ！ あなた、体格だって私と変わらないのに……」

「確かに……」

ポセツトはゆっくりとミコに歩み寄った。

「え、な、何よ？」

「動かないでください」

ポセツトは膝をついて、ミコを抱きしめた。ミコの頭がポセツトの胸に収まる。

「きゃっ！ な、何すんのよ……！ ——え？」

ミコの耳に、信じがたい音が聞こえた。

「——うそ……」

一定のテンポを刻む心音。それ以外に、たくさんの雑音が聞こえる。何かが廻る音、噛み合って擦れ合う音。途切れることなく続く奇怪な音の連続。

「僕の体は、体のほとんどが機械になっています。さっきの怪力も、異常な跳躍力も、全てこの体に備えられた機能なんです」

ミコはしばらく、何も言えなかった。

「機械……ですって？」

「脳や内臓は違います。あと皮膚も。骨と一部の筋肉、関節が人工

の物になっているんです。見た目には分からないでしょう？ 裸になっても、人と同じですよ。外見はね」

「なんで……？ 事故にでも？」

「いえ、わからないんです」

「そんな……。――あ、それで、記憶を……？」

「はい。なぜこんな体なのか、確かめたくて」

「そう……だったの……。で、でも、便利ね。今みたいに、狼だつて倒せるんだもの」

「あまり……いい気分ではりませんけどね」

ポセツトは上着を拾い上げ、軽く羽織った。

「大変じゃない？ 機械の身体って」

「ええ、まあ。機械の体なのに、お腹はちゃんと減るし、トイレもします。動けば疲れるし、怪我をすればいたいし、血も出ます。ちゃんと寝ないと睡眠不足になりますしね」

ミコはくすつと笑った。

「機械の体なのに、随分人間くさいのね」

ミコはポセツトの泥にまみれた腕をさすった。

「すごく軽くて、強い物で出来ています。たぶん金属だと思うんですけど、調べてみてもこれだと思える金属が見つかりません」

「そうなんだー。へえ、君が機械とはねえ……」

ポセツトは寂しそうに目を細め、言った。

「あなたは、僕が怖くないんですか？」

「え？」

「僕は機械なんですよ？ 今見たとおり、人狼だって素手で倒せる力が備わっている。どんな怪物より恐ろしい。——人じゃないんですよ？」

ミコは立ち上がって、動かせる右手だけでポセツトを抱きしめた。ただ、ポセツトの方が大きいので、ミコが抱きついた形になったが。

「怖くなんてないわよ。命の恩人だもの」

ポセツトは安心したように顔を少しゆるめ、途端に泣き出しそうなほど脆く顔を崩して、顔を手で覆った。

「でも……。僕は時々怖くなるんです……。自分の体が、人とは違いすぎることに。それでいて、見た目がまるで人と同じなのが、怖いんです……。見つけ出そうとしている記憶が、本当に思いだして良いものなのかもわからない……」

ミコはやさしく笑みを浮かべ、ポセツトの頬に手を添えた。

「こんなに温かくて、こんなに優しくて、こんなに頼りになる機械なんてないわよ。あなたはポセツトくんでしょ？ 機械はあなたにくっついてるだけ。おまけよ」

ミコはポセツトから離れて、おぶつてと合図した。ポセツトは戸惑いながらも、ゆっくりミコを背負った。

でも、崩れた。

「きゃあ！ 何してるのよ！ ——あれ？」

ポセツトは本当に限界といったふうな顔をしていた。汗が滲み、腕が震え、それがミコにも伝わる。

「すいません、無理に機能アクセルを使うと……こうなるんです。体の方が耐えられないほど力を出してしまうらしくて……」

そんな彼に負ぶってもらうのは気がひけたが、しばらく深呼吸をすると、ポセツトはすくつとミコを背負って立ち上がった。

「大丈夫なの？」

「心配いりません。もう大丈夫ですよ。体中痛いですけど。さあ、森を出しましょう。化け物が寝てる間に」

「ええ、そうね」

その？ アクセル（後書き）

もうちょっと続きます。

その？ 恩

「ポセット！ あれ見て！」

ナットがポセットの肩に飛び乗り、前を指した。

人狼の周りを女の子達に取り囲み、心配そうに見ていた。

「やっぱりグルだったんだ！」

「でも、なんで？」

「それは、あの子達の正体を知れば納得できますよ」

ポセットは女の子達に近づいていった。気づいた女の子達は睨みながら向き直り、人狼をかばうように柵を作った。

「大丈夫、彼をこれ以上痛めつける気はないよ。話を聞いてくれ」

女の子達は警戒を解くことなく、こちらを睨み続ける。

「なら、これでどうだい？」

ポセットは鞆から、木の実を取り出した。昨日摂って、今晚食べる予定だったあの木の実。

「あ、それは……」

ミコとナットが、遙か後ろにそびえる大木を見た。

「そうさ、この木はこの森に山ほど生えている。目印はあの五枚の花びらが特徴的な、黄色い花」

女の子達は戸惑い始めたようだった。

「これは君たちが昨日くれた実でもある。君たちはそうやって森に来た人の前に、怪しく神秘的な人間の女の子の姿で現れ、木の実を渡すことで、森の奥に人が住んでいるかのように思わせ、人を森の奥へと誘っていたんだ」

「そんなの、なんのために？」

「もちろん、狼に食べさせるためにですよ」

「ええ！」

「そうやって人を狼たちに捧げることで、恩を返していたんだ」

「恩って……何よ？」

「ここまで連れて来てもらった恩ですよ。言っていましたよね？人狼は山の上に住む野獣だと」

「ええ、ええ、言ったわ。図鑑にだって書いてあるわよ」

「そう、実際人狼は高い山に住む。高く険しい山の環境だったから

こそ、二足での素早く機敏な動きと、大きな体が必要だったんだから。でも、この人狼は森にいる。なぜか？」

「なぜ？」

「たぶん、群れからはぐれたか、追い出されたんでしょう。幼い頃にね。そして、山から降り、知らぬ間にこの森へとたどり着いた。山からあるものを運んできたことにも気づくことなく」

「あるものって……？」

「この木の、種ですよ」

「え？」

ポセツトは持っていた実をガブリとかじり、果肉を食べ終えた固い種を手のひらの上で転がした。

「恐らく、山を降りるときに口にしたのでしょう。この木の実をね。そして、この森に来て、排泄した」

険しい山とは違い、まったく種類の違う森の環境の中、この実に敵はいなかった。動物は食べられる実と食べられない実を短い命の中で見分けるすべを知る。それは親から子へと受け継がれていくわけだが、突然現れ、しかもそれ以外に同じ種類のなかったその木は、動物から相手にされることなく無事実を付けるまでに大きくなった。

「実は森の動物たちの新しい餌となり、森のあちこちに広く分布していった」

その最中、見たのだ。自分をこの楽園に連れてきてくれた人狼が、ウサギなどの小動物を食べてなんとか生きている様を。そして、自分の実に夢中になるあまり、背後の人狼に気づかず、食べられた小鳥を。

「これだと思ったんだろう。最初はきつと、実を沢山付けることで小動物達が集まり、それをその人狼が襲って食べて、成り立っていた」

しかし、やがて人狼大きくなり、ウサギやリスでは足りなくなつた。

「それに、主に肉を食す狼はこの実を食べない。小動物がいなくなつてしまつては、自分が広がることができなくなる。そこで、閃いた」

いつしか木の意志は人の形をつくり、夜な夜な人を森に誘うようになった。

「人を森に迷い込ませ、それを人狼に捧げる。人が来たことは森全体に広がった自分の同胞を通じて、花の匂いで伝える。人狼はより匂いの強い方へと向かえば、餌にありつける。まあ、今回は人狼が従えた森の狼たちのほうが先にやって来たみたいだけど」

女の子達は無表情でただ聞いていた。人狼が起きる気配は全くない。

「僕を森から追い出そうとしたのは、機械なのが分かったからだろう？ 食べられないものを捧げて、意味がないからね」

女の子たちは一斉にポセットを見て、歩み寄った。そして、一斉に言った。

「この子は、孤独だった。餌を採る術も知らぬまま、群れとはぐれ、空腹に耐えかねて、本能に逆らって私の実を口にした。私は枯れそうだった。最後の力を振り絞って実らせた最後の実が、この子に飲み込まれ、そしてこの子が行き着いたこの森で、私もこの子も命を長らえた。私は、私を生きさせてくれたこの子を守ってみせる」

女の子達は蛍のようなくつもの小さい光の粒になって、散り散りに舞った。驚く二人と二匹の目の前で、光は一つに集まって、一人の女の子になった。

女の子は泡を吹く人狼を慈愛のまなざしで見つめると、ポセット達に向き直って言った。

「でも、お前達は到底餌にはなりそうにない。人の作ったものが、人を守っているからだ。この子が寝ている今なら、安全に森を出て行ける。願わくば出て行って欲しい」

「もちろん、出て行かせてもらうよ」

その？ 恩（後書き）

もうちよい。

その？ 道の先へ

森の出口は意外と近かった。舗装の雑な道路にでて、森の中でこちらを見つめる女の子に手を振りながら、森が遠のくまでしばらく歩いた。

「自分を運んでくれた狼を育てようと……。恩の深い花もあったものね」

「もしかしたら、どの花もそうなのかもしれませんよ。気づいていないだけで、僕たちを守ってくれているのかも」

「どっちにしても、生きて出られて良かったよー。それに結局、ポセットの記憶とは関係なかったね」

「ああ、そうだね」

月明かりを背に、一本道を歩いていく。道ばたには昨日の朝見た、黄色い五枚の花びら。

「こんなところにも伸びてきているのね」

「そのうち、もっと大きくなりますよ。あの人狼が息絶えるまでね」

「恩返しを終えたら、あの子はどうするんだろうね」

「恩を返す相手ならうんというさ。敵もそれに見合うだけいるだろ

うけど」

しばらくして、近くの町に着いた。夜が遅いこともあって、宿にチェックインするのも苦労したが、なんとか入れてもらえた。

世話焼きの宿のおばちゃんが怪我をかばいながらミコをお風呂に入れてくれて、きれいにしてから消毒と包帯をやり直して、ベッドに寝かせた。出血は大体止まっていたが、感染病の恐れがある。

「もう行くの？」

食料とトンファアの充電、お腹にぐるぐる包帯を巻いて手当を終えたポセットに、ミコが言った。ポセットは、同じく包帯ぐるぐるで丸くなったナット（嫌がったが、無理矢理お風呂に入れたら拗ねて寝た）を肩に乗せ、小さくうなずいた。それから、ポケットから宿代の大小のコインとお札をだして、戸棚の上に置いた。

「そう。記憶、見つかるの良いわね」

「ええ、きつと見つけてみせますよ。ミコさんもお大事に」

ドアに手をかけた。ミコが言った。

「また……、会える？」

ポセットは振り返って、微笑みながら言った。

「ええ、また会う日を楽しみにしています」

「そうね、また会えるわよね。次あったときは、きっと何かご馳走させてもらおうわ。木だってあんなに立派な恩返ししてるんだもの、私も負けてられないわ」

ミコはそう言って笑った。

「ええ、楽しみにしています」

「むにゃ。じゃあね、ミコさん。あんまり無茶したらダメだよ」

「うん。気をつけるわ、猫くん。じゃあね」

軽く手を振ってわかれた。

がらんとした部屋の中で、ミコがつぶやいた。

「また、面白い旅話ができたわ。機械の体の少年と、勇敢でちよつと抜けた黒猫と、恩の深い木の話……」

宿のベッドは柔らかく、すぐに眠りに落ちた。肩の傷が癒えて、もっと遠くに旅を続けても、彼女は今日を忘れることはないだろう。

ポセツトは気の向くまま、歩き始めた。地図は捨ててきた。明確な目的地など初めからない。

ポセツトは鞆に入っていたもう一つの実を取り出して、ナットと二つに分けた。そして、道ばたにそっと種を埋めた。

「ポセツトも恩返しして欲しいの？」

「たまには感謝されるのも悪くないなと思ってさ」

東の空はもうすぐ朝日が昇り、白んだ紫に染まっていくだろう。
ポセツトは朝から逃げるように真っ直ぐ続く道を歩き出した。

舗装が剥げ、ほとんど砂利道となった長い道を、一人の少年が旅を続けている。藍色の帽子、黒のスカーフ、帽子と同じ藍の上下ジャケット、白の鞆、腰にはトンファ。そして肩にはもちろん、黒色の猫が一匹行儀良く座っていた。

黒猫のナツトが尋ねた。

「次はどこに行くの？ ポセツト」

ポセツトと呼ばれた少年が答えた。

「さあ、わからない。でも、行ってみればわかるよ」

やがて朝が彼らに追いつくだろう。

少年は薄くなった星を見上げながら、足を止めることなく進んでいく。長く続く一本道に真っ直ぐな足跡を残し、次の場所へと旅を続けていった。

その？ 道の先へ（後書き）

はい、続きません。

でもちよいちよい手直しすることになるかもです。

読んでいただき、ありがとうございました。

次ができたら、またあげさせていたどうかと思います。

誤字脱字など改善すべき点の指摘、その他感想などいただけたら嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145o/>

恩返しの森

2011年5月17日20時15分発行